



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

「シク教・最終章 その魅力」

われらは六月に生誕地ナンカーナー・サーヒブを訪れた。もう、十分すぎるぐらいに堪能したはずである。ところがだ、読者諸氏よ。突然九月に「また行きたい」、否、「また行く！」と言ってきた御仁がいた。

同じ行程で同じ場所に行きたいと宣もうた。

(まったくの驚きだよ。前代未聞だよ。誰だと思う。読者諸氏よ)

あのシャクティ女優である。そして今度は女性二人で行って無事に帰ってきた。

神よ。なぜに美しさと暴挙？を彼女に与えたのか。

(だれか止められないの!?)

シャクティさんを引き付けたものは何なのだろうか。彼女なりにシク教が分かってきたようなのである。最初の訪問は感情の高ぶりをもたらしたが知識がなかった。徐々に知ることによって新たな感動を求めて行ったのではないかと、わが輩は推測している。

わが輩も、あの感動をもとにシク教の魅力を再確認してみたい。

「シク教の人はグルの肖像画に礼拝する」

と、ある日本人が言った。南インドに住んでいる四十年来の友人である。インド文化に詳しいはずの人なのだが、シク教についてあまり知らないようである。

たしかに、シク教寺院には開祖ナーナクの絵が掲げてある。それは礼拝の対象ではない。偶像を否定するシク教にあって、聖典グラント・サーヒブだけが重要なのである。しかし、それさえも崇拝の対象ではない。聖典の「真理の言葉」だけが重要なのである。

(コトバだけじゃ、物足りないのが凡人だよ)

仏教徒には仏像、キリスト教徒は十字架、あの厳しいイスラーム教徒でさえもコーランがある。

グルが偶像を否定しても、のちの凡人は何かを偶像化する。これが人間の常である。人は何か崇拝する対象物なしでは、不安で収まりがつかない。

聖者譚でも同じことが言える。グルの亡きあと信奉者たちは彼を「神聖化」する。それはグルの説いた真理、人間像から遠ざかることではないだろうか。

近年は肖像画＝真理の言葉として、暗黙の裡に認められているようである。わが旧友の見聞は間違いではなかったことになる。

わが輩はどうもナーナクの肖像画が好きになれない。なぜなのか、自分でも分からない。

しかし、ナーナク物語には興味をもった。彼はクシャトリヤ（武人）階級で正統派ヒンドゥー教徒の家に生まれた。パンジャブ州はイスラーム教とヒンドゥー教が拮抗する地域である。両方の影響を受けたナーナクは、それらを超えた新たなる教えをつくる必要があった。

彼は子供のときから宗教的資質に恵まれていた。19歳で結婚し二人の子供を授かった。役人であったが、瞑想と讃歌の宗教的な生活を送っていた。

30歳のとき神秘体験をしている。「神はヒンドゥーでもムスリムでもない。私の行く道は神の道だ」と彼は宣言した。これ以降、本格的な宗教活動をするようになった。

わが輩が関心を示したのは、そのような聖者譚ではない。ナーナクの姉ナーナキーとの関係である。

姉がジャイ・ラームと結婚してスルターンプル（現パトナ）の町に嫁いだとき、なんと姉にくっついて行き同居してしまったというのである。彼はことのほか姉を慕っていた。彼の名前は姉の名前に由来すると云われている。

わが一家は但馬の山奥から大阪に出てきた。両親は朝から晩まで共働きで、姉が母の代役を務めた。姉は母以上に＜母性＞であった。ナーナクも同じであったのではないかと、わが輩は勝手に思い込んでいる。だからエンパシー（共感）を感じたのである。

シク教の習慣、風体はわれら日本人に馴染めないものがある。しかし、姉と弟の交流だけは、何となく馴染めると思わないかい。読者諸氏よ。

エンパシーは、外的要因（習慣、風体）を超えるからである。

（なぜか「瀬戸の花嫁」を口ずさむわが輩がいる）